

松本清張全集 22

松本清張全集 22

文藝春秋

屈折回路・象の白い脚・他

定価 1400円

1978年4月15日第4刷

© 松本清張

檉原雅春

株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町 3

電話(代表)03—265・1211

凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えます

屈折回路

3

象の白い脚

175

砂の審廷

361

解説 色川大吉

457

装 幀 伊 藤 憲 治

曲折回路

第一章

1

従兄の香取喜會一が熊本で死んだという電報を私が貰ったのは、昭和三十三年の冬になりかけの頃だった。私は折返して香取喜會一の妻の江津子に返電して、葬式には行けない事情を断った。

香取喜會一とは長い間文通が途絶えていたので、彼が病気をしていたということは私は全然知らなかった。香取喜會一は、私の母の妹の息子に当る。彼はT大の医学部を出てから間もなく熊本県の県衛生試験所に入っていた。今ではそこで技師になっている。

香取喜會一と私とが最後に遇ったのは去年の春だった。彼は、ときどき、厚生省か何かの会議で上京して来た。いつも私に連絡しないで素通りで帰ることが多かったが、去年は私の勤めている学校に電話を寄越して、二人で銀座に出て飲んだことがある。それが最後だった。

死の電報を貰ったとき、私はそのときの彼の様子を思い泛べたが、健康そうな顔色といい、仕事に対する抱負といい、どうも死の予想が彼にあったようには考えられなかった。彼は相当に飲むがおいしい酒で、少し出歯の口を絶えず開けてにこにこしていた。こちらから話題をひき引き

ないと、彼のほうから積極的なものを云うというタイプではなかった。私より一つ上だから三十六歳である。

私は返電のあと、彼の妻江津子に彼の最期の模様を詳しく報らせてくれるように書き送った。それにはしばらく返事がこなかった。多分、葬式の済んだあと、いろいろな雑用で書くひまがないのだらうと思っていたが、十日ばかり経って、やっと江津子からの手紙が来た。

それで初めて私は香取喜會一が自殺したことを知った。江津子の文面には、その辺を簡単に書いてあるが、香取喜會一は熊本県の山鹿という温泉町に近い山林で首をくくった、とある。原因には全く心当りが無く、神経衰弱としか考えられない、彼は死の前一週間ばかり勤めを休んで、家の中でぶらぶらしていた、というようなことが几帳面な文章で書いてあった。

この江津子は東京の生れで、なんでも、香取がときどき出張で東京に来るとき、役所関係の人の世話で結婚したのだった。当時、私は胸を患って一年ばかり清瀬に入院していたので、その結婚式というのには出席しなかったが、私が快くなってから香取夫婦を二、三度見たことがある。江津子は面長な顔で、少しばかり陰のある目鼻立ちをもっていた。近眼なのか、人をみつめるときや、遠い所を眺めるときなど、眉根を少し寄せて眼を細める癖があった。そんなとき瞳が鋭くなる。

江津子については、そんな印象しか私にはない。いつも

夫婦づれだから、彼女は香取喜會一のうしろに撫で肩な姿で無言で控えていた。現在は夫婦の間に女の子が一人いるが、たしか三つくらいになっているはずだった。

香取に死なれて、その後江津子はどうするつもりだろうか、という考えが、電報をもらったときも、手紙がきたときも一番に私の頭に泛んだ。県の衛生試験所の技師といえど、金回りのいい開業医と違い、サラリーマンだから、夫がいなくなれば、江津子もその土地に残る必要はないことになる。それに、給料もそう多くは貰っていないに違いなかった。むろん、大学の講師をしている私の給料などよりは多少多いに違いないが、香取に遺産らしいものがあるはずはなかった。

香取の葬式に行けなかったことが、しばらく私の気持ちを落着かなくさせていた。学校の教師というのは、その気になれば、暇はいくらでも作れる。私がこの従兄の葬式に行けなかったのは、多少「行けなかった」という気持が強かったのだ。東京と熊本との遠い距離は、自分への口実であった。

それが病死でなく、自殺だと知ったとき、私は今度は積極的に熊本に行く気持になった。葬式に行けなかったという責を果すのでなく、もっと私を乗り気にさせる何かがあった。

香取喜會一は、江津子の報らせて来たように、実際、神経衰弱で自殺したのだろうか。彼女の文面を見ると、彼女

自身が多少それに疑いを持っているようでもある。事実、私の知っている香取喜會一は、首を吊るほどの神経衰弱に陥る男には思えなかった。彼は学生時代にはラグビーの選手だった。背は高くなかったが、肩幅が広く、ずんぐりとした正方形の箱のような感じだった。そんな男が衛生試験所に勤めて、細菌か何かを顕微鏡でのぞくような仕事をするのが、ちょっと似つかわしくないくらいだった。

私が熊本に降りたのは、東京を夜発った翌日の午後二時だった。私は香取夫婦とは東京以外の土地で遇ったことはなかった。

香取喜會一の家は、朱塗りの八幡宮のある近くだった。公団住宅めいたブロックの家で、それが狭い生垣を一つ一つ持って同じようにいくつも並んでいた。私が玄関を開けると、三つぐらいの女の子が赤いセーターで出て来たが、すぐに奥に走り込んだ。その顔は香取喜會一にそっくりだった。

そのあとから江津子が出て来た。私は久しぶりに彼女の眼を細めるあの表情に出遇った。明るい陽射しを受けた玄関の格子戸を背に逆光になっているせいかな、彼女はしばらく私が誰であるか分らないふうだった。私は今日来ることを電報していなかったのである。

仏壇は、この家でいちばん広い八畳の間にあった。まだ花輪がそのままになっていたが、それには県の衛生試験所の関係者や製薬会社の名札などが下がっていた。

焼香を済ませて、横にうつむいて坐っている江津子と初めて話をしたが、以前から見ると、彼女はかなりはきはきした口の利き方をした。尤も、夫に死なれて早くもそういうふうになつて来たともいえる。弔問客が今でもときどきあるのか、彼女は玄関をのぞいたときから、普段着でない上等の着物をきていた。黒っぽい地色や柄は当然として、江津子はそれで衿もとから上の頸や顔の色の白さに合わせて意識して着ているようでもあった。

女の子が絶えず坐っている母親の肩や腕にまつわりついていた。

遺書は手紙でも知らされたが、もう一度どんなふうにかかれていたかを私は訊いた。江津子は、それには至極簡単に、子供のことを頼むとあるだけだったと云った。それも彼女が手紙に書いた範囲内だった。彼女は涙を見せないで、淡泊な表情をしていた。

「神経衰弱ということだが、実際、そうなんですか？」

私は彼女から知らされた瞬間から抱いた疑問を云った。

「はい。……多少、そういうところがないでもありませんでした」

江津子は伏眼で答え、白い咽喉をちょっと動かして息を整えた。両肩がなだらかに落ちて、坐っていても、その背の高さを感じさせる女だった。

「試験所のほうは、死ぬ一週間ばかり前から休みまして、家で何となく過していました。その前に、とても根を詰め

た仕事があって、毎晩帰りが遅いことがありました。いつもは役所で出来なかったものを家へ持って帰っていましたが、今度だけは全部役所でやっていました。それがかえって神経にいいなかつたようですわ」

「それは何か面倒な試験ですか？」

「香取は、わたくしには何も申しませんし、聞いても分りませんから、詳しくは知りません。でも、その試験のあと相当分厚い報告書を書いていたようでした。いつもと変わっているといえ、急ぐリポートはいつも家へ持って帰っていました、今度の分だけは役所で仕上げていたようです」

「そのあと多少ノイローゼになったというんですね。それはその試験の結果が思わしくなかつたとか、リポートの出来が拙かつたとかいうようなことに関係があるんですか？」

江津子は、よく分らないが、多少、それを気にしていた節が無いでもない、と云った。要するにはっきりした原因は分らないというのである。

私は、こういう問題によくありがちな、香取喜會一に女でも出来て、それで悩んだのではないかと考え、それとなく江津子に訊いてみた。すると、彼女はやはり眼を鋭く細め、

「それならまだいいんですけれど、そういうことはなかつたようですわ」

と、膝に組んだ指を弄ぶようにして答えた。女がいたなら、まだいいんだが、という言葉は、夫婦の間が冷たかったから出たわけではあるまい。むしろ、香取喜會一は遊びのほうは全く駄目だったという香取の融通のなさの説明であらう。

「遺書はほかの人に宛てたものもありましたか？」

「それはございました。衛生試験所の所長さんに一通と、ごく親しい同僚の方に一通ございました」

「その中に香取の死の原因を想像させる文章は無かったのですか？」

「同僚の方は、その遺書をわたくしに見せてくださいました。でも、それはただ、生前世話になった、ほかの者にもよろしく、といった程度でした」

「所長さんのは？」

「所長さん宛ての分は、わたくしは見えていません。というよりも、所長さんに見せていただけなかったのです」

所長宛ての遺書だけが江津子に見せられなかったのは、妻に報らせては不都合なことが書かれてあったのだろうか。この場合、またしても香取喜會一に隠し女があったと推定しよう。だが、それなら親しい同僚にこそそれを告白しておくのが普通ではなからうか。そんなことは所長には云えないものだ。では、所長が江津子に見せなかった遺書の文句はどういうことだろう？

それは江津子こそ報らされていないが、周りの同僚は知

っていることではなからうか。

私は江津子にそれを云わなかった。

「明日、喜會一が死んだ場所に行ってみたいと思います」

江津子はまた私を細い眼つきで眺め、

「それなら、わたくしがご案内しますわ」

と云った。

「手紙には山鹿温泉と書いてありましたが、ここから相当遠いんですか？」

「いいえ、汽車で行っても一時間そこそこです。山林は、その温泉場から三キロぐらい離れています。……せっかくいらしたんですから、明日の晩は、その山鹿温泉にでもお入りになったらいかがですか？」

「そうですね、都合によつてはね」

「わたくしも子供を連れて参りますわ」

私は、その晩は市中の旅館に泊ったが、江津子が、子供を連れて参りますわ、と云った言葉の意味を考えていた。

彼女もその山鹿温泉に泊るつもりでそう云ったのだろうか。

2

山鹿の温泉街を車で過ぎて、しばらく北に進むと、それまで展がっていた肥後平野がそこで窄まり、それまで遠くに見えていた山なみの端にたどりついた。国道だか県道だか分らないひどい路を岐れると、車はもっと悪い路を進んだ。坂を進んで切通しのような場所と山裾の迂回をいくつ

も重ねた。

隣に坐っている江津子は、細い声で途切れ途切れに私に話をした。彼女は三つになる女の子の相手をしたり、窓から見える景色に方角の説明などをした。考えてみると、この女も喜曾と一緒にたつて東京を離れてから五年経っている。

今日も彼女は黒っぽい着物をきていた。もしかすると夫の自殺の現場に喪服で来るのではないかと思つたのは、私にはそれだけ彼女の今夜の行動が気がかりだつたせいかもしれない。もし喪服だつたら、その温泉地に寄らずにまっすぐに熊本の家に帰るだろう。しかし、この服装では判断がつかなかった。私の心には昨日の彼女の言葉が今朝まで謎のようにひつかかつている。

「香取は、今度の研究の前にもむずかしい仕事をやっていたようすわ」

と、彼女は女の子との相手の合間に私に云つた。

「それはいつごろでしたか？」

「もう半年くらい前になるかしら。でも、そのときは、それが済んだあとは大そう元気そうでしたわ」

「そういう研究は、始終やっていたんですか？」

「小さなことは毎日のようでしたが、大きい研究がそんなふうにときどきございます。みなさんと一緒にいいんですが、香取が主任みたいにしていました。それはどうしてもやらなければならないことらしく、リポートが面倒臭いと、

始終こぼしてましたわ」

「そのリポートは、県の衛生部かどこかに出すんですか？」

「それもあつたかも知りませんが、もっと違った方面に出していたようでしたわ」

「違った方面？」

「それはわたくしにははっきり分りません。なんでも、そういう研究のためにお金が出てゐる所があるんだそうでございます。とても県の予算では研究費が足りないのので、そういう資金を貰つてゐる所には、必ず報告をすることになつてゐるんだそうです」

私は、それは厚生省のどこかの局から直接に來てゐるのではないかと思つた。江津子が云う研究資金というのは補助金のことであらう。役所はとにかくいろいろな報告を求めてくる。私のいる大学でも、一体、どのような用事に使うのか分らないような統計や報告を始終作成させられていた。

「そこで停めて下さい」

山の断面が両方から迫つて、赤い崖の見える場所で江津子は車を停めさせた。

草が枯れて、青くさい黄色になつてゐた。芒の穂は汚らしく萎んで黒ずんで折れてゐた。

江津子は子供の手を引いて徑を先に立つて歩いた。着物の裾からのぞく足袋の白さが眼に沁みた。

小暗い林の中に入った。白茶けた木が密生し、そこだけは青い葉がいっぱい上にかぶさっていた。

「ここでしたわ」

と、彼女は黄色い草の上に眼を落とした。

「ここに香取の吸った煙草の吸殻がいっぱい撒かれています。首を吊った樹は、あれですわ」

特に白茶けた太い樹が地面のすぐ上から二股に岐れ、それぞれ勝手な枝の伸ばし方をしていた。私は見当で、水平な枝の一つに眼を止めた。子供は離れた所で草の上を走っていた。

「検視の警察の方が夥しい吸殻を見て、ご主人はよっぽど死ぬのを考えあぐねておられたんですね、と云ってましたわ。あれで五十本以上ありました。吸口の根もとまで黒くなっているのと、半分くらい吸って捨てられたもののがありました」

香取喜曾一が死に迫られて苛々している様子が私の眼の前に揺らいだ。あの幅の広い肩を草の上に踞すわまらせて、暗い中で赤い火を息づかせている姿である。

香取喜曾一は、実際にどのような理由で死んだのだろうか。神経衰弱というが、江津子もそれを心から納得してはいないようだった。だが、他人にはそう説明するよりほかないといった口調だった。

私は、江津子は香取喜曾一を愛していたのだろうかと思つた。香取のほうがちろ妻をよけいに愛していたのでは

ないか。香取が妻には短い遺書しか残さなかったのは、その夫婦生活において、妻の愛情の狭さに彼自身が姿勢を縮こまらせていたというような気がする。しかし、これは私の想像であつた。

それにしても、香取喜曾一は所長だけに何を訴えたのだろうか。

「所長さんというのは、もう年配の方ですか？」

枯れた林の奥には百舌ももことが啼ういていた。女の子は小さな木を両手でゆすっていた。

「もう五十をすぎてらっしゃいますわ」

「所長と喜曾一とはよかったのですね？」

「香取の話では信用されてるようなふうでした」

明日、その所長に会ってみようという考えが私に起きた。

江津子には告げなかった。

話が途切れたので、江津子はそこを立ち去るつもりになつてか、草の上に膝を折り、二股に岐れた樹に向つて合掌した。私がおよそ見当をつけていたその頭の上の水平の枝がまさしくそれに違いないと確信した。すると、彼女の顔の位置の正面が、枝から下つた香取の足のあつたところであらうか。

彼女は、撫で肩をしばらく冷たい空気の中に静止させていた。枯草の匂いが先ほどからしていたのに私は初めて気がついた。彼女のその合掌している姿を見ると、このまま熊本の自宅に帰るのか、それとも子供を連れて今夜、山鹿

の温泉宿に入るのか、私はまたしても占うような気持ちになっていた。

江津子が草の上から立ち上がったとき、その背が一段と伸びたような感じがした。顔に泪の一筋も見えなかった。上唇が少しまくれた感じで、わずかに歯がのぞいていた。彼女は子供を呼び、私を従えて汚い芒の群れている丘を下った。運転手は狭い座席に横になっていた。

車はもとのほうへ引返し、再び山裾から離れ、平野の端に下りて行った。来るとき気がつかなかった低い連山が平野の涯の片隅に特別に裾をうすめていた。

幾つもの村落が過ぎた。戻るにつれて家の数がふえてくる。「山鹿・福島」の標識を出したバスが桑畠のつづく悪い路を苦勞して走っていた。山鹿の町の屋根が私の眼に入るようになる、私は眼の端の視野に江津子の様子を入れておいた。子供と一緒にわたしも参ります、といった彼女の昨日の言葉の意味が外国語のように二通りにも三通りにも解釈された。

山鹿の町に入った。行きがけに見定めておいた通り、両側が旅館ばかりで、うしろに白い湯気が高く上っていた。陽射しは、まだ屋根の上の半分に残っていた。

江津子が急に運転手の背中に上体を寄せた。

「運転手さん、ここでもいいわ」

車は玄関の前をすぎて、情勢で長い白塀の半分近く来て停った。塀の上には、一列に松の梢が出ていた。運転手は

首をねじ曲げてバックをはじめた。

「葬式のあと、とても疲れましたわ」

と江津子は、運転手に自分が凝視されているように眼をそむけて私に低声で云い、一しきり片づいたら、子供を連れてここにくるつもりだったと云った。

江津子がふいに停車を云いつけたことといい、彼女はさっきから考え迷っていたことに決断をつけたというふうに私には思われた。私は返事ができなかった。

玄関の屋根が破風造りの古風で大きな旅館だったが、法被をきた頭の禿げた番頭が小走りに寄ってきて、車のドアを外から開けた。女の子が先に降りて玄関までの砂利を走ると、あとから出た年増の女中が女の子を自分の帯の下に引きつけるようにして両手を取り、下を向いて笑いかけた。私はそれを見て、この温泉宿が江津子の行きつけの家だと察した。香取夫婦が年に二、三回くらい来ていたように思われた。

頭の禿げた番頭が、江津子に何度もおじぎをして低声で何か云っていたが、その顔つきからして悔みを短く述べているようであった。その番頭は神妙な顔で口を動かしながらも、江津子のうしろに立っている私に一瞥をくれるのを忘れなかった。

私の背後の往還をバスがすれ違い、こっちに寄ってきたバスが番頭の禿頭をしばく影にした。——私は江津子のあとから暗い玄関に歩きながら、香取喜曾一之首吊り姿を

眼に泛べた。

3

宿で決めてくれた私の部屋は二階のまん中あたりだった。裏の障子を開けると、黒い川水に灯が流れていた。香取江津子とは玄関で別れたきりで、どこに部屋をとったか分らない。女中が湯の案内にくるまで彼女は現われなかった。

「いまの奥さんの部屋はどこですか？」

「階下の楓の間です。内庭のほうに向いています」

手摺りから下を覗いてみても分らないはずだった。子供の声も聞こえない道理で、反対側になっている。しかし、外の風景が見える部屋をどうして取らなかったのだろう。廊下を歩いて来たときに見たのだが、内庭というのは狭くて貧弱なものだった。あんなところに向かっているのだったら、きっと部屋も暗いに違いない。

「それは、香取さん夫婦の行きつけの部屋だね？」

女中はうなずいた。そうだろう、そんな部屋は香取喜會一の好みである。江津子は、香取との習性でそこに入ったのか、自殺の現場に行つての帰りだから弔う意味でそうしたのか、それとも私の部屋と距離を置いたためなのか、よく分らなかった。宿は空いていた。浴室にも三、四人の男客しかいなかった。風呂から上がって戻ると、別な女中がきた。玄関前で江津子の子供の手を握っていた年増で、目の下に小さなほくろがあった。

「あの、香取さんの奥さまが、階下で一緒に食事したのが、ご都合を伺うようにとのことでございますが」
女中の笑顔には客馴れたものがあつたが、悪い感じではなかった。

私はちょっと迷つたが、結局、それは断つた。子供のいる食卓は落ちつかないに決まっていた。いま、それを拒絶すると、あとで江津子がひとりでここに来るような気がした。

「ちょっと。あなたは、香取君夫婦がここに来たときは、いつも、その部屋の係りをしていたんですね？」

女中は、はい、と云つて、何となく微笑した。

私は、自分の部屋で若い女中を對手にぼそぼそと夕食をとつた。銚子を一本あけたあと、飯も手短かに済ました。

「コーヒー出来ますか？」

「はあ。あの、インスタントですけれど」

私は、江津子がいつ来てもいいように、早く食卓を片付けさせた。地方紙の夕刊を読んだり、鞆の中の雑誌を取り出して活字に眼をさらしたりしたが、やはり心は動揺していた。胸の中が張ってくる。女中は、寒いから雨戸を入れますようか、ときいた。あとで何度も女中に入入りされるのはいやだから、景色のいいのに雨戸を入れさせた。

「お床をとりましょうか？」

それはまだあとでいい、連絡したときに来てくれ、と云つておいた。食事を済ましてから一時間ばかり経ち、九時

を過ぎた。私は、このまま江津子がこないような気もする。彼女の部屋で夕食を誘われたのを断ったので、先方でも気を兼ねてここにはこないのかと思った。しかし、来るような気もした。聞きたい話もまだ残っている。香取喜會一の自殺の原因を、もう少し彼女から探らねばならなかった。今日の昼間、香取が首を吊った現場に行ったとき、彼女は十分にそれを語っていない。香取が一切を書いた遺書は衛生試験所長に手渡しているというが、彼女がその内容を全く察していないとは思えなかった。

十時前になって、違棚に置いてある電話が鳴った。

「まだお寝みになりませんか？」

江津子が云った。

「ええ……本を読んでいます。寂しい温泉ですね」

なぜ、寂しいと云ったのか。熱海や長岡あたりの温泉地に馴れているので、そう云ったのか。事実、遠くのほうで三味線が聞こえていた。

「伺ってもよろしいですか？」彼女は、その言葉をかなりはつきりと云った。私は、どうぞ、と云ったが、電話を切ったあと、身体を落ちつかせるのに困った。

江津子は、宿の着物の上に半纏でなく羽織をひっかけていた。淡い茶色の宿の着物の上に、黒っぽい羽織であった。「やっと子供が寝ましたの」と、彼女は私の坐っている机の前にこないで、縁側の籐椅子に腰を下ろした。

「もう雨戸をお閉めになったの？」

「はあ、なんだか寒いので」

「夜景がよろしいのに」

昼間、枯れ草の上で見た眩しくらいに白い足袋ではなく、素足が出ていた。注文したコーヒ―を女中が運んで来た。置く場所に迷っていたが、私は彼女の掛けている椅子の前にあるテーブルに置くようにさせ、ついでに自分も起つて、^た対い合せの椅子に腰を下ろした。

天井には暗い電灯がついている。彼女の横顔を照らしているのは、座敷の強い灯のほうだった。湯上がりのせいか、昼間よりも髪の毛がきちんとうしろに梳か^すれていた。

「お誘いしても来て下さらなかったのですね」

彼女はコーヒ―茶碗を抱えて、眼で軽く笑った。

「ええ、なんだか初めてでは気が詰りそうなので」

「きつと、子供がうるさいからだと思いましたわ。でも、やつと寝ましたの。やっぱ子供がいると騒々しいですわ」
「これから大変ですな」

私のその一言は、彼女の今後をのぞき見るような、また、ことによったら、その相談を受けてもいいような意味合いになっていた。

江津子は、それには黙っていた。顔も動かさずに、眼を端のほうにやっていた。案外、自分のことをあまり考えていないというふうだった。

「明日何時でお発ち^たですの？」

彼女は、やはり顔を動かさな^いで訊いた。

「昼までに博多に着くようにしたいんです。板付から午後
の飛行機に乗りたと思っています」

「熊本から博多までは、急行で二時間ですわ」

二時間だから、それまでの時間、もう少し一緒に居てく
れるようにというふうにも取れるし、時間を知らせて、早
く駅に行くようにすすめているようでもあった。

私は何となく座敷の卓の上に置いた煙草を取りに行つて、
戻った。そのとき、彼女の顔は私の正面に向いていた。

「あなたは……」と、彼女は私に低く云いかけた。

「あなたは北海道のスツツという所をご存じですか？」

「スツツ？ 知りませんね。どんな字を書くんですか？」

「寿という字に都と書きますわ」

「北海道のどの辺でしょうか？ ぼくは函館、札幌、小樽
ぐらいしか知らないんです」

「日本海側のほうで、函館から小樽のほうに回る途中だそ
うです」

「いや、知りません」

なぜ、江津子は、そんな話題を出したのだろうか。彼女
が話の接穂に困って、突然、思いつきを云ったような気が
した。

「何か、そこにお知り合いでも？」

「いいえ」

彼女は小さく云うと、両肘を椅子の両側に載せ、自分の
顎のところで両指を組み、眼を伏せて爪を見るようにして

いた。

「香取がそこに行つたんですの。自殺をする一カ月前ぐら
いでしたわ」

私は江津子が香取喜會一の自殺の原因を語り出したと思
つた。

「旅行ですか？」

「とにかく、そこに行つたことは間違いありません」

彼女は組んだ指を動かしていた。

「……札幌から小樽、旭川と見物して来たようだけれど、
その寿都という町に行つたことはたしかです。あとで、そ
の宿屋から葉書の挨拶状が来ていましたから」

「では、観光旅行ですね」

「香取は、できたら礼文島にも行つてみたかったんじゃない
かと思うんです」

「礼文島に？」

私は、地図の上にある北海道の離島を眼に泛べた。船で
行つても相当にありそうである。礼文島といえ、ずっと
前にそこで金環食の観測が行なわれたという以外には知識
はなかった。

「そんなことを香取は話していたんですか？」

「いいえ、わたくしにはそう申しません。でも、そんな気
がするんです。……熊本の交通公社に勤めている香取の友
人があります。その方に香取は、北海道旅行の前、礼文島に
行く船の事情など訊いていたそうですから、多分、間違い